



第4図 三角山 I 遺跡磨製石鏃

⑥加世田市志風頭遺跡 (第3図4~13)

標高約60mの台地に所在している。縄文早期の土器は少量の岩本式があるが、大部分は前平式土器であり、それらに共伴して磨製石鏃は合計18点出土しており、加えて磨製石鏃未製品が16点出土している。

磨製石鏃の形態は長さが短く基部がわずかにふくらむものが大部分であり、一部二等辺三角形のものも含まれる。打製石鏃は黒曜石、チャート、頁岩、鉄石英のものが計16点出土している。

⑦南種子町石ノ峯遺跡 (第3図14~16)

種子島南部で中央寄りの標高約160mの台地に所在している。塞ノ神B式に伴い頁岩製の磨製石鏃が3点出土しており、この3点はそれぞれ大きさや形態が異なるものである。また打製石鏃は1点出土している。

⑧指宿市小牧3A遺跡 (第2図13~15)

標高65mの台地に所在している。吉田式土器を主体としているが、若干の前平式土器と少量の加栗山式土器や桑ノ丸式土器を含む。磨製石鏃は3点出土しており塚ノ越出土例と荒田原出土例に類似するものが各1点と、未製品の可能性がある縁辺に剥離痕が残るものが出土している。打製石鏃は黒曜石、頁岩、石英を利用したものが計5点出土しており、それらの形態は多様であり時期的な差が考えられている。

⑨中種子町三角山 I 遺跡 (第4図)

種子島の中央部の標高245mの台地に所在している。磨製石鏃は塞ノ神式土器に伴い2点出土している。いずれも中央に1ヶ所穿孔をもつものである。

⑩吾平町原口岡遺跡

前平式土器に伴い5点の磨製石鏃が出土している。塚ノ

越遺跡例と同様の形態のものと、荒田原遺跡例と同形態のものが各2点ずつ出土している。そのほかの1点は両側縁を研磨により鋸歯縁に整形している。

⑪始良町建昌城跡

標高約110mの台地に所在しており、前平式土器に伴い磨製石鏃が1点出土している。先端部のみの欠損品であるが、荒田原タイプと思われる。また打製石鏃は黒曜石製やたんばく石製のものが多く出土している。

3 磨製石鏃の形態分類

以前磨製石鏃を集成した時点では単独出土が多く、また出土遺跡も少ないなかで形態分類を行い、大きく1類と2類に分類した。しかし、その後の資料の増加に伴いこれまでにない形態も認められるようになり、ここでは新たに再分類を行うものである。

①長身細型 (荒田原タイプ)

基本的に二等辺三角形に近い形状であり、長さに比較して幅が狭く、基部はわずかに凹む。両側縁は基部近くで幅が少し狭くなり、基部端で外側に広がる特徴をもつ。両面を面的に研磨後両縁辺を両面から研磨し鑄をつくる。基部も同様なものが多い。

荒田原遺跡、ホケノ頭遺跡のほか鷹爪野遺跡で多く出土している。

②短身広型 (塚ノ越タイプ)

正三角形に近い形状であり、長さと同程度となる。両側縁は直線状よりわずかに丸味をもち、基部も直線的ではなく、わずかにふくらむのが特徴である。両平面は面的に研磨され、縁辺は鑄状に研磨され鋭くされている。基部は側縁と同様なもののほかに細い基部面を有し面的に研磨されているものもある。塚ノ越遺跡、西丸尾遺跡や榎崎B遺跡などこれまで単独出土例が多かったが、志風頭遺跡では多く発見されている。

③長身広型 (牛之原タイプ)

全長5cmを越す大型品であり両側縁は直線的ではなく丸味をもち、基部もわずかにふくらむ。短身広型を長く大型にしたような形態である。牛之原遺跡と石ノ峰遺跡で各1点ずつ出土している。



第5図 磨製石鏃の形態分類